

令和7年度 前学期
科目責任者による授業科目の総合評価報告書
(1学年・3学年必修科目)



自治医科大学看護学部

目次

【1 学年前学期必修科目】

生物学

基礎英語

生化学

人体の構造と機能Ⅰ

社会福祉論

看護学概論

実践基礎看護学概論Ⅰ

看護技術論Ⅰ

看護技術演習Ⅰ

生涯発達看護論

看護基礎セミナー

対象の理解実習

【3 学年前学期必修科目】

健康生活支援技術Ⅰ

小児実践看護学Ⅲ

周産期看護実習

小児期看護実習

急性期看護実習

慢性期看護実習

老年期看護実習

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
生物学	宮川美里	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本授業については、今年度の授業評価は実施されなかった。

授業態度に問題はなく、学生が授業ごとに提出するリアクションペーパーの内容は回数を重ねるごとに充実し、授業内容と日常生活が深く結びついている理解が高まっていることが確認できた。学生が独自に調べた内容を共有することもあり、授業者側にとっても学びとなった。

授業前後に質問を受ける機会が多く、学生が授業に対して高い関心を持っていることが伺えた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

105名の履修者のうち、平均点は87.5点、標準偏差は8.8点、中央値は89点、最小点は60点、最大点は99点であった。

本授業では、暗記に偏らず、各単元（代謝学・免疫学・進化学・遺伝学基礎・遺伝学応用・脳科学・生態学）の背景にあるコンセプトを理解することに重点を置いた。リアクションペーパーの内容からも、高校での学習内容と本授業の意義を理解したという意見が多く見られた。

さらに、学生は論文や科学情報の入手方法（Google Scholar による検索など）を理解し、テレビやネットなどを通して無料で得られる情報と、科学論文の信頼性の差についても認識できた。

3. 教育方法の評価

本授業では、生物学を初めて学ぶ学生もいることから、理解を深めるためにスライドに写真や図を多用した。また、専門用語や言葉の定義、特に生物学の用語と日常語の違いを明確に説明した。より深く学びたい学生のために、参考図書や学術サイトも紹介した。提出されたリアクションペーパーをもとに説明不足の点を確認し、次回の授業で補足した。目標到達状況も良好であることから、教育方法として妥当であったと考える。

4. 次年度以降に向けた改善策

- 授業テーマに関連する最新の学術論文やニュースに目を通し、分かりやすく整理して説明できるようにする。
- 特に遺伝学では、高校生物を履修していない学生にとってセントラルドグマの理解が難しいため、授業内でより丁寧に説明する。
- 高校で生物学を履修していた学生と未履修の学生で基礎知識に差があるため、最低限理解してほしい内容と発展的内容を明確に区別する。
- リアクションペーパーに「分かりにくかったこと・分からなかったこと」の欄を設け、学生に記入してもらい、次回の授業でフォローする。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
基礎英語	鹿野浩子	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

授業における学生の受講態度は真摯であった。毎週ムードルで実施された小テストの受講状況も概ね良好であった。

「学生による授業科目の評価票」の回収率は0%であった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目における目的「異文化を理解し、異なる言語を話す人とコミュニケーションをとる基礎能力を養う」は、概ね達成された。到達目標「英語で英語圏の文化を理解し、英語によるコミュニケーションの基礎能力を習得する」についても概ね達成された。

成績分布は、優が概ねであり、良が数名で、可および不可はゼロであった。

3. 教育方法の評価

看護師を目指す学生が、外国人患者とコミュニケーションを取るために必要な基礎的な医学英語の知識を身につけられるよう、テキスト以外にもレジュメを配布し、動画などの視聴を通じて「見る・聞く・話す」活動を取り入れる工夫を行った。

4. 次年度以降に向けた改善策

学生が主体的に学ぶ意欲を持てるよう、興味や関心を引き出す工夫を凝らした講義内容を展開するとともに、グループワークやディスカッションなどを通じて、能動的な学修をより一層促していく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
生化学	坂下英司	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本年度は4名の担当教員による分担講義を実施した。学生の受講態度は総じて良好で、遅刻・欠席が少なく真摯に学習に取り組む姿勢が見られた。授業中の発問に対する即答は困難な場合が多いものの、理解が不十分ながらも自ら思考し応答しようとする積極性は評価に値する。生化学に対する学習姿勢は真摯であり、授業外学習の充実により理解度のさらなる向上が期待される。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

生化学は「物質代謝から人体の仕組みを科学的に理解し、看護学・医学の基盤知識を習得する」ことを目的としている。期末試験は多肢選択式70問で実施し、受験者106名の平均点は59.9点（調整後78.5点）、中央値57.1点であった。信頼係数0.815と高い値を示し、試験の信頼性は十分確保されている。得点調整後に合格基準に満たない学生は5名で、大多数が基礎的理解に到達した（不合格者5名も再試験により全員合格）。項目別分析では、代謝総論や糖代謝の基本問題は良好に理解されていた一方、脂質代謝、タンパク質代謝、ヌクレオチド代謝、ホメオスタシスにおいて正答率の低い設問が多く、知識定着に課題が残った。特にヌクレオチド代謝の一部では正答率10%未満の設問もあり、授業内容の見直しや作問の改善が必要である。

3. 教育方法の評価

前任担当者の退職に伴い、新たに教授1名、助教1名を加えた4名体制で講義を実施した。新任教員は前任者の担当領域を引き継ぎ、教材や指導内容の共有を図りながら講義を展開した。教育手法として、PowerPoint 講義にハンドアウト配布とMoodleでのPDF資料提供を組み合わせ実施した。とくにMoodleでの講義資料提供は、見づらい図表の拡大を可能とすることから学習支援として有効であったと評価する。学生の受講態度は良好であったが、試験結果から、基礎理解は問題ないものの、代謝各論やホメオスタシスの領域で理解不足が明らかとなった。現行の授業手法は概ね機能しているが、学生が難解と感ずる内容については、より丁寧な解説と理解定着を促す工夫が必要である。

4. 次年度以降に向けた改善策

今後は学習到達度のばらつきが大きい領域、特に脂質・ヌクレオチド代謝やホメオスタシスの講義を補強する必要がある。また、難問や低正答率の設問については問題文や出題範囲の妥当性を精査し、学習効果を適切に測定できる形に改善する。Moodleを活用した確認問題を提供することで、自主学習を支援する仕組みを整えることも想定している。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
人体の構造と機能Ⅰ	平尾温司	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本年度の授業評価アンケートの回答者は 2 名にとどまったため、全体的な評価を行うことは難しい。しかし、本科目では毎回講義冒頭に 3 分間の復習テストを実施しており、その結果から概ね良好な学習状況がうかがえる。

また、骨格・筋肉に関する自主的な学習会を模型を用いて実施したところ、受講生の約 60% が参加した。このことは、学生の学習意欲が高いことを示すものである。さらに、学習会においては学生が主体的に模型を操作し、理解を深める姿が見られた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本年度の全体平均点は 72 点であり、成績分布から判断すると、科目の目的・目標は概ね達成されていると考えられる。具体的には、理解度の高い学生が一定数存在し、基礎的知識の習得は十分であったと判断される。

3. 教育方法の評価

解剖学教育においては、立体的理解を促すことが重要である。本科目では、骨格模型を用いた学習会により、この点を効果的に補強できたと考えられる。また、法律上ヒト臓器の標本使用が制限される中で、ウシやブタの心臓を用いたプラストミック標本を講義で使用することで、座学のみでは得られにくい立体的理解を補完できた。その他にも Visible Body などの 3D 教材も使用して、教科書の挿絵だけでは足りない部分を補完している。

4. 次年度以降に向けた改善策

学生より「声が小さく聞き取りにくい」という意見が 1 件あった。これは、前の授業時間で使用されたハンドマイクが充電切れであったため、ピンマイクを使用したことに起因すると考えられる。ピンマイクは音量が大きくなりやすく、距離の調整によって聞き取りづらさが生じたと思われる。については、看護学務課にお願いし、大教室Ⅳにハンドマイクを 2 本常備していただくことで、今後の授業運営上の支障を回避できると考える。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
社会福祉論	中津原 聖	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

今年度は、レポート課題を二本提出させたが、皆遅滞なく、また内容も申し分ないものだった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

当方の体調の問題もあり、例年に比べ講義内容の進み具合がかなり遅れてしまった。そのため課題を出さざるを得なくなったが、全員しっかりした意見を持ち、それを上手く表現していたことに感心した。

3. 教育方法の評価

昨年までと講義内容を少し変えたため、うまくいかないことも多かった。来年度は分量を加減しながら進めていきたい。講義スタイルについては、特に変えていない。

4. 次年度以降に向けた改善策

上記の通り、伝えたいこと、教えねばならないことを上手くセレクトしながら、学生が少しでも興味を持てるように、講義を工夫していきたい。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護学概論	小原 泉	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

4 月の入学直後からスタートする授業科目であり、大学での学習に不慣れな時期であるため、学生から出席管理やレポート提出方法などについて細かな質問が多いのは例年同様であるが、出席管理について問題となる学生はいなかった。レポート提出については、評価レポート提出期限の 1 時間前から作成したレポートの印刷を看護学部内で行おうとしたところプリンターのトラブルが発生し、提出期限に間に合わなかった学生が発生した。コンピューターや周辺機器の操作に不慣れなことや、余裕をもった行動がとれていないことも提出期限に間に合わなかったことに影響していると考えられた。レポートの書き方についても、他科目での学び（レポートの書き方）を活かして、適切に作成した学生が大半であった。

R6 年度と R7 年度において、学生による授業評価アンケートへの回答者はいなかったが、毎回の授業後に学生にリアクションペーパーの記載を求めており、その内容からは初めて看護学を学ぶ意欲が高いことが確認された。授業の内容や方法について、改善を求める反応は特に認めなかった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

授業科目の目的・目標に合わせてルーブリックを作成し、評価レポートを評価した。その結果、R6 年度は A 評価 80 名、B 評価 16 名、C 評価 9 名（うち再試験受験者 6 名）、R7 年度は A 評価 90 名、B 評価 3 名、C 評価 12 名（うち再試験受験者 1 名）で、全体的には目標は達成できていると考える。C 評価の学生は、レポート課題の理解が浅く、求められることが言及されていないために、ルーブリックに照らし合わせると評価が低くなっていた。

3. 教育方法の評価

講義科目であるが、看護学を初めて学ぶ学生の関心を高め、授業内容の理解を深めるために、動画の利用や看護実践事例を豊富に紹介した。専門用語は 1 つ 1 つ平易な言葉で解説し、リアクションペーパーから説明不足の点を確認し、次の授業で再度説明した。前述のように、目標到達状況も良好であることから、教育方法としても妥当な方法が用いられていると考える。

4. 次年度以降に向けた改善策

目的・目標や教育方法は変更を要しないが、大学入学直後の授業科目であることを念頭におき、レポート課題で求めていることを、ルーブリックを参照してもらいながら丁寧に説明して学生の理解を深めること、コンピューターや周辺機器の操作方法を身に付けていくといった基本的な事項を繰り返し確認して、大学生としての学習行動の自立も支援していく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
実践基礎看護学概論Ⅰ	小原 泉	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

5 月より開始する授業科目で、出席管理などの基本的な行動に関して質問してくる学生は大きく減ったが、学生証忘れや授業中の居眠りが増え始めた。迷惑行為に該当するような授業中の態度を認めた学生はいなかった。

R6 年度および R7 年度は、学生による授業評価アンケートへの回答者はいなかったが、毎回の授業後に学生にリアクションペーパーの記載を求めており、その内容からは初めて看護学を学ぶ意欲が高いことが確認された。授業の内容や方法について、改善を求める反応は特に認めなかった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

授業科目の目的・目標に合わせてルーブリックを作成し、レポートを評価した。その結果、R6 年度は A 評価 74 名、B 評価 19 名、C 評価 12 名（全員が再試験受験者）、R7 年度は A 評価 88 名、B 評価 11 名、C 評価 6 名（全員が再試験受験者）で、全体的には目標は達成できていると考える。C 評価の学生は、レポート課題の理解が浅く、求められることが言及されていないために、ルーブリックに照らし合わせると評価が低くなって再試験対象となっていた。

3. 教育方法の評価

今後看護過程を学ぶ上で論理的思考力を高めることが重要であるため、学生同士の意見交換や教員とのやり取りをする時間を設け、授業科目を通して同じ事例を用いながら論理的思考について解説を行った。学生のリアクションペーパーから授業の理解度を把握し、随時調整しながら進めた。論理的な思考をふんでレポート課題で何を求めているのか、ルーブリックを作成し説明し、例年、求められるレポート課題の理解不足から評価が低い学生を認めるため、繰り返し説明を行った。

4. 次年度以降に向けた改善策

初学者に合わせた解説の時間を増やし、説明の繰り返しや進度を調整したが、評価レポートの内容から十分な論理的思考力が確認できない学生も存在することから、例示をさらにわかりやすくしたり、用いる事例の医学的情報の量を減らすなどにより、授業目標の到達状況をさらに改善する。

毎年、レポート課題の理解不足から再試験となる学生が 1 割程度発生しているが、繰り返し説明をしても聞いていない、聞いていても理解できていない、ことが主要因と考えている。理解不足が多い箇所をさらに噛み砕いて説明する、理解したことを学生同士で確認し合う時間をもつなど、学生の状況に合わせた工夫を重ねる。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護技術論Ⅰ	井上育子	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目における、学生による授業評価の提出は0件であった。科目独自に授業回ごとに配布しているミニットペーパーでは、授業への要望等を尋ねているが、改善をもとめる内容等の記載はなく、学生の学習活動において問題は生じなかったと考える。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目では「看護技術の基盤となる考え方をふまえて、対象の生活環境の調整に関する看護技術の原理や原則を学習する」を学習目的とし、それに準じた3つの到達目標を設定した。成績評価は、筆記試験90%、学習態度10%の割合で行った。本年度の成績は、A評価60名、B評価33名、C評価12名（うち2名は再試験受験者）で平均点は81.33点であった。筆記試験で満点を取得した学生も1名いた。

これらの結果から、本科目の目的・目標は達成されたと判断できる。

3. 教育方法の評価

本科目は、看護技術演習Ⅰと連動した科目構成となっており、看護技術における安全・安楽・自立の考え方を基盤に、生活環境の調整に関する看護技術の原理・原則を学べるよう授業を組み立てた。

看護技術を行う上で必要となる知識については、既習の知識を想起し関連付けられるような説明や解説を加えるなど、学生のレディネスに合わせた講義内容への工夫を心がけた。また、看護技術の手順に関する説明では、言語のみでは理解が難しい内容が多いため、講義時間に余裕がある場合には動画の視聴時間を設け、教員による解説を加える工夫も行った。さらに、講義内容の振り返りとして毎回の授業で配布しているミニットペーパーを確認し、学生から寄せられた「今回の授業内容でよく理解できなかった点、疑問に思った点」について、必要に応じて次回授業で再度取り上げ解説した。

これらの取り組みにより、学生の知識定着に一定の効果があったと考える。

4. 次年度以降に向けた改善策

看護技術の習得に必要な原理・原則を学び、学生が知識をより確実に定着させられるよう、既習の知識との関連づけを一層促進する授業の工夫を行う。また、学生の学びの状況をより的確に把握できるよう、アクティブラーニングの機会を積極的に設け、復習の要点を提示する機会も取り入れていく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護技術演習Ⅰ	井上育子	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目における、学生による授業評価の提出は0件であった。授業時間内での評価への協力の呼びかけが十分ではなかったことが一因と考えられるため、今後はアナウンスの時期や方法を工夫していく必要がある。技術演習の授業では、一部の学生を除きほとんどの学生が、自己の技術習得に向けて積極的に質問する様子がみられた。また、身体的理由による追試験対象となった学生が1名いたが、回復状況に合わせ追試験時期を調整し、適切に対応した。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本科目では学習目的に準じた3つの到達目標を設定し、成績評価は、技術試験50%と事前・事後課題および演習参加態度50%とした評価を行った。

本年度の成績はA評価86名、B評価16名、C評価3名であった。前年はA評価90名、B評価15名であり、若干A評価の人数は減少したものの、8割以上の学生がA評価という結果であった。評価対象の一つである空床のベッドメイキング技術試験において、技術試験（1回目）の合格者は99名で、前年の98名とほぼ同様の結果であった。技術試験（2回目）で技術練習が不十分と評価された学生については、本科目の再試験として、技術の根拠をまとめるレポート課題および技術試験（3回目）を実施した結果、全員が合格基準に達した。

これらの結果から、本科目の学習目的・到達目標は十分に達成されたと判断できる。

3. 教育方法の評価

学生のレディネスを高めるため、事前課題の評価配分を多くとり、演習では知識との関連を意識できるよう要点を示しながら指導を行った。事後課題としては、習得した技術を自分なりの手順書にまとめ、自己の技術を振り返る課題を提示した。

事前課題では、一部取り組みが低めの学生も存在したが、ほとんどの学生はすべての課題に取り組み、演習に臨むことができていた。事後課題ではレイアウトや分量を定めず、学生の発想を生かせるよう自由度を高く設定した結果、多くの学生が自ら構成を考え工夫して取り組み、主体的な学びを支援する効果が一定程度得られた。さらに、技術試験に向けて空床ベッドメイキング技術の習得を促進するため、教員が作成した技術動画をMoodleに掲載したところ、多くの学生が繰り返し視聴しており、技術習得を支援する一助となったと考える。

これらの取り組みは、学生の看護技術習得に寄与したと考えられる。

4. 次年度以降に向けた改善策

本科目で習得すべき看護技術について、学生が原理・原則への理解を深められるよう、演習方法のさらなる工夫を検討する。学生が自身の実施した看護技術における課題を明確化し、それに応じた改善策を見いだせるような事後課題の提示についても検討を行っていく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
看護基礎セミナー	川上勝	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目では、「大学で看護学を学ぶ基本を理解する」を目的とし、到達目標を「多様な年代の様々な立場にある人々の生き方を学ぶ」と「大学で学ぶことの基礎となるスタディ・スキルを習得する」と設定し、授業を展開した。

学生から授業評価の提出は無かったが、提出レポートや各グループでの演習内容から、授業を通して興味関心が高まったと考えられる。今後、更に学びを深めるような補助教材の活用や学習サポート体制の構築を検討する必要があると思われる。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本授業の到達目標である「多様な年代や立場にある人々の生き方を学ぶ」については、様々な年代の人々との会話やグループ別演習において、グループディスカッションを通して多様な意見を共有し、他者理解を深める姿勢が確認できた。また、課題レポートでは、自らの学びを振り返り、看護学習における基盤となる多様性の理解を文章化できていた。「大学で学ぶためのスタディ・スキルの習得」については、課題遂行やレポート作成を通じて、情報整理や論理的表現の力を培うことができた。

成績分布において、上位層（A・B 評価）が全体の約 98%を占めており、授業の到達目標は概ね達成されていたと評価できる。一方で、C 評価となった学生（全体の約 2%）は、グループワークへの参加態度や課題レポートの提出状況に課題が見られた。今後は、学生個々への学習支援をさらに充実させる必要がある。

3. 教育方法の評価

本年度は、講義・事例検討・グループワークを組み合わせた教育方法を採用した。事例を活用した授業では、学生が具体的な場面を想定しながら学習できる点が好評であった。また、実際の看護場面を想定したシミュレーション演習を取り入れたことにより、老年期の対象への個別的な看護についての理解が深まったと考えられる。しかし、グループワークでは、一部の学生が議論に参加しにくい状況が見受けられ、今後はファシリテーションの工夫が必要である。

4. 次年度以降に向けた改善策

・オリエンテーションの充実

授業開始時に、科目の目的や到達目標、学習方法、評価基準をより明確に提示することで、学生が授業全体の見通しを持ちやすくする。

・グループ別演習内容の標準化

グループワークの内容や進め方に差が出ると、学びの深まりに不均衡が生じる可能性がある。そこで、演習の進行ガイドラインを担当教員に提示する。

・課題レポートテーマの明確化

テーマ設定や提出方法等が曖昧であると、学生によって取り組み方や理解度にばらつきが生じやすい。学生が安心して課題に取り組めるようにテーマ設定や提出方法等の詳細を整理する。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
対象の理解実習	内堀 真弓	必修	1 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

「学生による授業科目の評価票」の提出は0件であり、「授業に関する学生の声」について、特に意見は届けられていない。学生の学習活動に特段問題は見られなかった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

本実習は、対象の健康と生活環境、提供される医療のしくみと看護職の役割を学ぶことを通して、対象を理解する基礎的能力を養うことを目的としている。入院している対象の健康状態や生活環境を学ぶ病棟での実習、地域で生活する人々へのインタビューを通して対象を理解する実習、外来等での医療の仕組みを学ぶ見学実習といった3つの実習を行う。それぞれの実習目標に沿って到達状況を確認しているが、総合評価は、A評価94名、B評価11名と昨年度（A評価90名、B評価14名、C評価1名）に引き続き高い評価となった。

3. 教育方法の評価

感染症拡大以降、健康管理の徹底のため、規定よりも1週間早く健康アプリを通じた健康状態の報告を促している。今年度も同様に実施したところ、感染症罹患者もなく、全員出席にて実習を終えることができ、健康管理の重要性理解の定着につながったと考える。

事前学習として調べ学習を課したことで、準備が不十分な学生が見られたものの、事前学習を持ち寄りグループで話し合う時間を設けたことで、互いに影響し合い、何を実習で学ぶかの言語化につながった。

また、最終日に行った学びの統合において、成果物として共同作成ポスターを仕上げる過程で、学生間で意見を出し合い、新たな気づきを得ることができた。

自らのコミュニケーションにおける言動や態度を知るために、テーマを設定したコミュニケーションの演習を実施した。昨年は演習から逸れ、雑談ともいえる状況が見られたが、今年度は対話をする学生のほかに観察者を置き、その役割を明確にしたことで、演習に集中する様子が見られた。また、お互いのコミュニケーションの傾向を指摘し合い、医療者としてのスキルの習得に向けた話し合いを実施することができた。他者を注意深く観察することで自身の傾向に気づき、実習への具体的な対策につながったと推察する。実習では対象者と直接やり取りをする機会を設けており、その際、対象者の話に耳を傾け、語られる内容から日常生活の情報を得ることの実際を体験できている様子であったが、実習記録に示すことについては課題を有する学生が見られた。

病棟での実習では、看護師のシャドーイングを通じて、対象の生活環境、看護師の役割、他職種連携の実際を見学する機会を設けた。見て学ぶだけでは学生によって学習の到達度に差が生じてしまうため、質問時間やカンファレンスの場で意味づけられるよう支援した。実際に目にした事項について、考えたこと、疑問に思ったことを言葉にし、確認できたことで、学びの深まりが見られた。

4. 次年度以降に向けた改善策

上記に示すように、本科目の目的・目標の達成には至ったものの、事前学習への取り組み、実習での学びを記録に反映することについては、十分とは言えない学生が一定数見られた。そのため、次年度は以下のように改善する。

- ・実習オリエンテーションにて、事前学習の取り組み方法と内容について具体例を用いて説明する
- ・実習オリエンテーションにて、実習で求められていることをどのように記録するか例を示し、実際の実習指導の場で、情報として得られたものとそこからの学びの区別が明確になるよう、説明を加える

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
健康生活支援技術Ⅰ	青木さぎ里	必修	3年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生は、保健指導に関する理論と実践技術を結びつけ、模擬事例を通して主体的に学習する姿勢がみられた。特に、ロールプレイを通して対象理解や保健師としての姿勢、信頼関係の構築、行動変容支援を体験的に学ぶなど、アクティブ・ラーニングの効果が認められた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

学習目的「人々の保健行動の特性をふまえた健康問題の予防や健康の保持増進を図るための個人および家族を対象とした看護の方法を理解し、基本的な看護実践の技術を習得する」と到達目標への到達は概ね良好であった。Health Belief Model等の理論理解をもとに、保健指導計画の立案やロールプレイを通じて支援技術を具体化できていた。成績はA評価が9割以上であった。演習記録の記載に差がみられたため、今後は個々の準備状況に応じた助言を強化する。

3. 教育方法の評価

理論講義と演習の組合せは効果的で、理解を促進した。ロールプレイによる相互評価は、対象への共感や伝え方の工夫を促すなど教育的効果が高かった。

4. 次年度以降に向けた改善策

初回授業で全体構成と事前学習の意義を明確にし、学生が見通しをもって臨めるようにする。特に生活習慣病やメタボリックシンドロームに関する基礎知識の事前確認を促す。また、演習記録の書き方指導を強化し、学びの定着を図る。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
小児実践看護学Ⅲ	小西克恵	必修	3 年次前学期

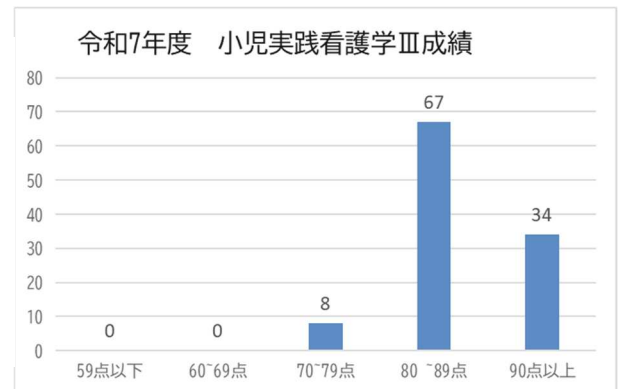
1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

「学生による授業評価」の提出は0件であったが、講義・演習で用いたリアクションペーパーからは、意欲的に取り組んでいたことが伺えた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

定期試験 60%、演習 40%で評価を行った。総合評価は、優が 101 名、良が 8 名となり全員が合格した。

総合評価の平均は 86.1（標準偏差 9.52）点であった。内訳として、試験の平均は 53.9（標準偏差 6.14）点、演習 32.3（標準偏差 4.24）点であった。



3. 教育方法の評価

1 か月で 15 コマを行う講義・演習科目である。8 コマの講義は 4 名が行うオムニバス講義であるため、事前に講義担当者と内容について打ち合わせを行った。試験の結果より講義コマの理解は十分得られたと考える。また、演習としてヘルスアセスメントを 6 コマで実施する。ヘルスアセスメントを行うにあたり、演習の準備性を高めるために事前課題に取り組む期間がおおよそ 1 週間となるように講義コマと演習コマのスケジュールを工夫した。看護過程の展開を学ぶにあたり、ペイパーペイシエントの情報の解釈・分析を行うツールとして、小児期看護実習で使用する記録用紙を活用し、順序だてて看護過程を展開するプロセスが経験できるように演習の組み立てを工夫した。演習後のリアクションペーパーを用いて ARCS モデルを参考に 16 項目を 5 段階で評価してもらった結果、「注意」「関連性」「自信」「満足度」の全項目で平均が 4 を超え、さらに、「自信」と「満足度」の平均が一昨年度より上昇していた。このため、演習の組み立てとしては成功したと考えている。

4. 次年度以降に向けた改善策

試験結果は、平均得点が 53.9（標準偏差 6.14）点であり、平均得点率は、89.8%となり、講義は学生の理解につながっていたと考えられる。しかし、小児の慢性疾患に関する制度や社会資源の活用を問う問題の正答率が極端に低い結果となっていたため、授業内容や復習の機会の確保を行うことを検討する。

ヘルスアセスメント演習に関しては、小児期の各論実習に向けた学習支援の充実を目指し、ペイパーペイシエント事例の構成・内容を再構築することで、より実践的かつ理解促進に寄与する教材へとブラッシュアップを進める。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
周産期看護実習	角川 志穂	必修	3 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

5 月からの実習に向けて、春季休業中に事前学習課題を課し、全員が取り組んだ。その結果、知識面では基本的な内容の復習を行ったうえで実習に臨むことができた。技術面については、2 年次後学期に演習を実施して以降、実施していなかったため、毎クール初日のオリエンテーション時に演習時間を設けた。これにより、全員が積極的に学習に取り組んでいた。

学生からの授業評価は 2 名のみの回答であり十分なデータとは言えないが、興味・関心を持って実習に臨み、実習を通して学びや成長につながったとの評価が得られた。また、毎クールの最終日には学内でテーマを設定し、グループ内で学びの共有を行った。どの学生も、2 週間の実習期間中に関わった多様な背景を持つ対象者への看護実践について考察し、ディスカッションを通じて理解を深めることができていた。

以上のことから、実習を通して学生個々があらゆる面で効果的な学習活動を行うことができたと考える。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

今年度よりルーブリックを導入し、学生および教員双方による評価を実施した。その結果、約 9 割の学生が A 評価を獲得し、残りの約 1 割が B 評価または C 評価であった。実習最終日に行った個別面接においても、概ね実習目的および目標が達成されていることを確認した。D 評価の学生はいなかったことから、設定された学習目的・目標は学生の到達可能な内容であったと考えられる。

3. 教育方法の評価

本実習では、周産期にある母子およびその家族への看護理解を目標に、1 週間のケース受け持ち実習（産褥期・新生児期）と 1 週間の機能別実習（外来、分娩室、NICU、地域など）を組み合わせ実施している。妊娠期から育児期にかけての一連の流れの中で継続した看護の重要性を理解できるよう、各部署での学びが断片化しないよう配慮し、実習最終日のまとめのカンファレンスで統合できるよう働きかけた。特に今年度は、継続看護を意識したグループディスカッションを進め、その成果は最終レポートにも反映されており、学生の理解促進に繋がったと考える。

産褥期・新生児期における看護過程の展開については、学内演習で事例を基に展開を行い、その学びを活かしながら実習でも取り組んだ。しかし、産後の対象者は日々状態が変化するため、看護過程の展開や記録整理に苦勞する学生が多く、時間を要する場面が見られた。そのため、担当教員が個別に丁寧な指導を行い、最終日にはすべての学生が対象者の全体像を把握し、看護実践の評価を適切に行うことができた。看護過程の展開における指導は教員 1 名につき学生 4～6 名としており、少人数制での個別指導は効果的であったと考えられる。

4. 次年度以降に向けた改善策

次年度に向けた課題として、実習終了後の臨地実習指導者との振り返りの中で、技術面の課題や実習目的を意識した主体的な実習に関する意見が挙げられた。これを踏まえ、対象者を意識した技術演習の実施や、学生の興味・関心を引き出す関わり方および教授方法の工夫について検討することが必要であると考え。また、看護過程の展開に時間を要す学生が多いことから、記録用紙の見直しや演習方法についても検討を行っていく。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
小児期看護実習	田村敦子	必修	3 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

今年度は、学生による授業評価（FD）の回答は1名のみであったが、その内容は概ね良好であった。多くの学生は「実習での学びが充実していた」と面談でも語っており、教育内容そのものへの不満は少なかったと考えられる。また、今年度から本格的に導入したルーブリックを活用して評価を行った。学生はルーブリックに沿って自己評価や学習の振り返りを行い、その点は有効であった。しかし一方で、学生がルーブリックの各項目の「表面的な問題数」などに意識を向けすぎる傾向が見られ、学習の深まりよりも点数獲得に焦点化してしまう様子も認められた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

科目の目的については、概ね達成された。成績分布は例年同様、A 評価が多く、基準を満たさない学生はいなかった。学生の多くが実習の終盤には自己の課題を把握し、指導者の助言を活かして改善を試みる姿勢を示した。高評価の学生が多い背景には、ルーブリックによる具体的な到達目標の提示が学習の道標となったことが影響していると考えられる。

3. 教育方法の評価

少人数グループ制と個別指導は引き続き有効であり、学生は安心して学習に臨むことができた。今年度からのルーブリック活用は、評価基準を明確にすることで教育の透明性を高め、学生の自己理解を促す効果があった。一方で、学生がルーブリックの「点数化」や「表面的な項目数」に強く意識を向ける傾向が見られ、学習の本質的な理解や振り返りの深さが十分に引き出せていない可能性がある。

4. 次年度以降に向けた改善策

1) ルーブリックの改善

項目の記述や評価方法を見直し、「問題の個数」ではなく「理解の質」や「思考の深さ」が反映されるように改訂する。学生に対してはルーブリックの活用意図を再度明確に説明し、単なる得点化ではなく学習プロセスの振り返りに重点を置くよう促す。

2) FD の回答率向上

学生にとって回答しやすい環境を整え、授業評価アンケートの回収率を高める工夫が必要である。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
急性期看護実習	佐藤幹代	必修	3 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

アンケート回答数 22 名（20%）であった。「授業の目的や目標、進め方や評価方法はシラバスと合致していた」「授業の目的や目標、進め方や評価方法に関する説明が理解できた」「教員や指導者の授業態度や関わり方は教育的であった」「学びやすい学習環境が整えられていた」「興味や関心をもてた」「学びや成長につながった」「満足だった」の項目において、「当てはまる・やや当てはまる」が 8 割強であった。しかし、「学習課題の質や量は適当であった」は、「どちらかといえば当てはまらない・当てはまらない」が 5 割弱と高かった。自由記載は、概ね肯定的な意見が多く、中には、記録が多く大変なイメージもある一方で、カンファレンスでの共有学習が有効に活用され、指導者・教員共に学生の学習を促進させることになったという、充実した実習につながったコメントもあった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

評価対象者 108 名の評価は、A 評価 103 名、B 評価 4 名、C 評価 1 名であり概ね目標は到達された。本実習では、「手術療法」により健康レベルが低下する患者を対象として、対象者とその家族を多面的に理解し、健康課題を整理し健康の回復と生活への適応を促すための看護展開をすることが目的にある。これらの看護実践については、細目の評価も概ね高かった。しかし、術後の急激な患者の変化をタイムリーに捉えきれない難しさもあり、これらの目標の一部の評価は低かった。また、「急性期における看護実践上の倫理的問題や意思決定について自己の考えや態度を思考する」の評価について、A 評価が 4 割弱、B 評価が 6 割弱と他の評価項目に比べて低かった。

3. 教育方法の評価

1) 実習目標とルーブリックの見直し：学生が主体的に学習の到達度を確認するためにルーブリックを用いている。一部、手術療法の治療過程で生じる機能障害や健康障害に加え、「生活障害」に着目した看護実践の評価を追記した。看護過程の展開を検討していく上で、術直後および短期的な生活障害に対する看護を重視することができたが、タイムリーに患者情報を捉えアセスメントする課題が残った。

2) 実習目標の到達達成に向けた学習支援：受け持ちを開始するタイミングが実習スケジュールで学生毎に異なることから、「共同問題」のアセスメントの妥当性がタイムリーに高められないといった課題があったため、実習初日の手術見学は中止し、オリエンテーションの充実をはかり、学生のレディネスに応じた事前課題の確認を行った。昨年度よりも受け持ち患者の情報を速やかに事前学習と連動させて思考することにつなげた。

3) 実習指導体制：今年度から 1 病棟に配置される学生数を減らしたことで、臨地指導者と連携し学習サポートがより手厚く行えた。病棟管理者および指導者との実習評価会議からも同様の評価を得た。

4) 看護実践上の倫理的問題および意思決定についてのテーマカンファレンス：学生を 2 グループに分け、教員がファシリテートをメインに行い討議の深まりは見られていたが、学生にとっては難易度が高かった。

4. 次年度以降に向けた改善策

- ・ルーブリック評価の記述について、表現の見直しを継続する。・アンケートへの協力をさらに促す。
- ・看護実践上の倫理的問題および意思決定について思考を深めるために、病棟ごとのショートカンファレンスでより意識する関わりや、実施日を 2 日間早めてテーマカンファレンスを振り返る日程を確保する。
- ・事前課題を課すことは学生にとって負担が大きいため、受け持ちの疾患特性に即した学習ポイントを担当教員からオリエンテーションを通して伝える工夫する。
- ・術前、術後のタイムリーな情報把握とアセスメントを強化するために、実習初日にミニ講義や集合型のオリエンテーションを企画する。
- ・実習指導体制については、可能な範囲で次年度も 1 病棟あたりの学生の配置人数を減らす。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
慢性期看護実習	長谷川 直人	必修	3 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

学生は、自治医科大学附属病院の成人系の病棟において、回復期および慢性期における健康課題をもつ成人期ないしは老年期にある患者 1～2 名を受け持ち、看護過程を活用して看護を実践した。看護過程の展開においては、受け持ち患者の病態や治療に伴う健康障害の特徴、ならびに家族役割や社会的役割、生活習慣の把握を通じた発達課題の特徴を捉え、病気をもちながらもその人らしい生活を送れるよう支援していた。看護問題の明確化や患者の自律性を高めるための看護実践に困難さを抱える学生が多かったが、臨地実習指導者や教員、グループメンバーと相談しながら学習課題と向き合い続けていた。

学生による授業評価は 21 件の回答が得られた。教員から看護問題を指定されて思うような実践ができなかった、教員と臨地実習指導者の間で見解の相違があり困惑したという意見が 1 件あったが、教員や指導者が沢山相談にのってくれて実習の励みになった、学びやすい環境であった、カンファレンスを通して看護実践の倫理や慢性期の特徴を深く考えることができた等、大多数は学びに寄与したとする反応であった。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

評価対象者全員が合格し、成績分布は「優」93.5%、「良」6.5%であった。昨年度と比して、看護過程における看護問題や看護計画の表現は約 10 ポイント、看護実践の評価は約 15 ポイント、患者の療養生活を送るための継続的な取り組みの支援は約 30 ポイント上昇し、看護問題の明確化とそれに伴う看護計画の充実が意図的かつ効果的な看護実践につながっていた。また、看護実践の倫理的問題に関する目標について、患者の健康課題の背景にある価値の対立の査定が約 20 ポイント上昇し、患者の生活者としての価値と病者役割の価値の対立、患者と患者を取り巻く人的環境との価値の対立がないかを捉えたことが、看護過程の充実につながっていたものと考えられた。

3. 教育方法の評価

学生の日々の気づきや学びに即した経験型の教育方略を重視して運営企画を策定し、毎クールの科目担当者会議で教育方法の具体を検討しながら進めたことが、学生の学びに寄与できたものとする。また、実習中の各病棟との進捗確認や実習後の評価会議において、学部と実習施設の連携は適切であったとの見解が得られた。主担当教員と副担当教員を配置し、科目責任者や学科科目責任者を含めて、適宜教育方法の相談や検討ができる体制が有効であったと考えられ、次年度もこの体制を継続する。

看護実践の倫理的問題については、事前課題を課し、実習初日のオリエンテーションで学びを確認、共有する時間を設けたこと、実習期間中の学びを統合するための倫理的問題に関するカンファレンス等が、達成度の上昇につながったものと考えられた。

4. 次年度以降に向けた改善策

引き続き、学生の実習経験や学び方の特徴の把握に努め、経験型の教育方略を重視して教育に取り組む。また、それを実施しやすいよう副担当専任の教員をなくし、各クールの主担当教員の担当学生数を本年度より減らして運用する。

科目責任者による授業科目の総合評価報告書

授業科目名	科目責任者	必修選択別	受講セメスター
老年期看護実習	川上勝	必修	3 年次前学期

1. 学生の学習活動の分析（学生による授業評価の内容を含む）

本科目では、老年期にある対象の療養の場の移行に関わる看護、または生活の場における看護の実際と、介護職等他職種との連携の実際を学ぶことを目的とし、老年期にある対象への看護を、療養や生活の場への移行を踏まえて学び、継続看護と多職種協働の重要性を理解することを到達目標として展開した。

学生から授業評価の提出は無かったが、実習終了後の評価面接や提出レポートから、学生の多くがそれぞれの実習施設での体験を通して、実習目的・目標に関連した事柄について学びを深めていた。特に受持ち事例への看護展開に加え、学内演習における他学生との学びの共有も学習成果に繋がっていた。

2. 目的・目標の到達状況（成績分布の概要を含む）

学生の成績分布を見ると、概ね目標に到達していると判断できる。具体的には、成績の上位層（A 評価）は約 98%を占め、老年期の生活機能レベルの変化や看護実践方法について適切に説明できていることが確認された。一方で、B 評価の学生（約 2%）については、老年期特有の疾患や症状の理解が不足している傾向や看護過程の展開において現状が十分反映できていない状況が続いており、知識の定着やアセスメント力の向上が課題となった。

3. 教育方法の評価

本科目は、高齢者が生活する場における実習と実習施設での学びを共有する学内演習を組み合わせた教育方法を採用した。実習施設での学びでは、学生が一人の高齢者を受持ち、看護を展開した。学内演習では実習施設別での学習体験等をまとめるワークと異なる実習施設での学びの共有を実施した。

高齢者と看護の視点で直接関わることで、老年期の対象への個別的なケアのあり方などについての理解が深まったと考えられる。グループワークでは、学生が議論に参加できるよう少人数となるよう配置したが、資料作成等に時間を要した場面もあり、今後はファシリテーションの工夫が必要である。

4. 次年度以降に向けた改善策

・学習支援の強化

実習において学習の進め方や理解度に個人差が見られるため、学生一人ひとりの状況に応じた支援を充実させることが課題である。特に、実習目標の具体化や振り返りの指導を通じて、学習の深まりを促す必要がある。

・各実習施設に関する事前情報の提供方法の検討

実習施設ごとに特徴や取り組みが異なるため、事前に学生が十分な理解を得られるような情報提供の仕組みを整える必要がある。情報の量や形式を工夫し、学生が安心して実習に臨める体制を整備することが求められる。

・学内演習における学びの共有方法の改善

学内演習で得られた学びが個人の体験にとどまらず、学生全体で共有・発展できるようにする工夫が課題である。発表やディスカッションの方法を見直すことで、学生同士が相互に学び合い、実習により活かせる学習環境を整えることが期待される。